



「がん放置療法」一世風靡

この人と会ったことはありません。ただこの人の Wikipedia に「敵対者 長尾和宏」と記されていたことがあります。ハブとマンガース？ 否、僕はこの人を尊敬していません。だからこそ、それは極論だと思ふ部分を議論したかった。いざいざここで会えるような気がしていました。が、叶わなかった。悲しみよりも複雑な気持ち先立ちます。なぜなら彼は、医療界きっての憎まれっ子であり、長生きしてまだまだ世に憚ると信じていましたから。やはり会えるときに会っておかなければダメですね。喧嘩でもいい、沈黙でもかまわない。サザンの歌ではないですが、逢いたくなかった時に君はここにいない。コロナ禍で一層、そんな気持ちになることが増えました。

269 医師 近藤誠氏

長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

〈がん放置療法〉や、〈がんもどき理論〉で一世を風靡（ふうも）びし、『患者よ、がんと闘うな』をはじめ多くの著作を出版された医師の近藤誠氏が、8月13日に亡くなりました。享年73。

報道によれば、その日近藤医師は、自身が院長を務める東京都渋谷区

のセカンドオピニオン外来に出勤途中、タクシーの中で体調不良を訴えて、病院に搬送されました。死因は虚血性心不全。いわゆる「心臓突然死」でした。

虚血性心不全とは、血液が循環していないという意味で、心臓の幹線道路である冠動脈が狭窄（きようさく）ないし詰まった結果、心臓の機能が低下し、全身に血液が送り出せなくなった状態。別名、急性冠症候群とも呼ばれます。

突発性心不全の場合は、症状が現れてから1時間以内に死に至る

ケースが多く、わが国では、年間約5万人が心臓突然死をしていますが、これは高齢者に限ったことではありません。

近藤医師も、まさかご自分が今日死ぬとは思いませんでした。死んだことにも気が付いていないかも。あるいは、もしも病院内など、AEDが使える環境であれば、救命できたかもしれません。

さて、僕が近藤医師の天敵とまで言われた理由は、2015年に『長尾先生、「近藤誠理論」のどこが間違っているのですか？』という本を出版したからです。抗がん剤は、やる／やらないの二元論ではなく、「やめどき」が大切であり、がん放置療法は後期高齢者に関しては一部正しくもあるが、若い人のがんは、上手に闘うという選択肢もある、と主張しました。

現代医療の全否定でも全肯定でもなく「中庸」、つまりはほどほどに生きること…近藤医師は僕にとって、偉大な反面教師であったのかもしれない。

対面叶わなかった偉大な反面教師

